
双月の照らす世界譚～月夕の魔王～

月代 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双月の照らす世界譚〜月夕の魔王〜

【Nコード】

N3340J

【作者名】

月代 唯

【あらすじ】

二人の神の化身である二つの月の光が、闇の夜を照らしてくれる世界。そこでは魔法が使える人間は魔族と呼ばれ、人間の住む領土から迫害されていた。

彼らは望む。自らの居場所を指し示してくれる、魔王の再誕を。そしてそれと時を同じくして、生きる意味を見失った青年「蔵本透樹」が謎の声に導かれてこの世界へやって来ようとしていた。

プロローグ

私達の世界の空には、いつも二つの月があった。

その月が二年に一度一つになると勇者が生まれ、百年に一度太陽を隠すと魔王が生まれるという。

これははるか昔から、この世界に伝わってきた予言だ。

百年前、この予言と同じように魔王が生まれ、勇者によって滅ぼされた。

そしてもうすぐ百年が経ち、きっとまた魔王が生まれるだろう。

だから、私はなんとしてでも魔王を見つけ出さなければならぬ。きっとその魔王が、私達の希望になるから。

東から昇る神と西から昇る女神

百年に一度、太陽を蝕むとき

世界から魔王が生まれるであろう

だが、二年に一度

二人の神が合わさる時に産まれた子ならば

魔王を滅ぼすことができるであろう

すべては夜を照らす、二人の神の思し召しなり

一、暗黒の声

もし、勇者が自分の為ではなく人の為に世界を救う存在ならば、俺は絶対に勇者にはなれないだろう。

RPGは、モンスターを倒して強くなったり、謎を解いて物語を進めていったりするから楽しい。だから、決してゲームの中の世界を救いたいという気持ちで戦っているわけではない。ゲームは所詮、ただの暇つぶしの遊びでしかない。

たった今、俺の目の前のテレビの画面の中で、魔王と勇者との闘いが繰り広げられていた。

魔王は、黒い鎧とマントを着て黒い剣を握っている。肌もどす黒いし、爪が凶器になりそうなほど鋭い。そしてその顔は・・・人のモノではなかった。見れば誰もが畏怖するような要素を存分に取り入れたその姿は、世界を悪に包み込む存在に相応しい。そして、これから勇者に倒される存在としても相応しかった。

対して俺の操作する勇者は、派手な赤いマントに黄金に輝く鎧に立派な剣を持っていた。勇者に憧れる子供から見ればその姿はとても格好良く映るかもしれないが、魔王に勇猛果敢に挑もうとしているこの勇者は、かつて弱いモンスターの中の代表であるスライムに勝つことさえやっとだったのだ。そこから世界を救うことが出来るほどの力を手に入れることなんて、常識から考えてまず在り得ない事だ。それこそ、死ぬほどの努力をしない限り。

確かに、勇者はゲームの中で何度か死んだ。そして生き返った。徐々に強いモンスターを倒して行って、魔王のもとまで辿りついたのだ。

魔王は、ラスボスなだけに今まで闘ってきた敵よりずっとデカイし強い。だが俺は、どのくらいまでレベルを上げれば楽にコイツに勝てるかを知っている。そして慣れた手つきでコントローラーを操作し、魔王に止めをさした。

「ふう……」

コントローラーを放り投げ、蔵本透樹くらもととおきは座っていたベッドにそのまま倒れこんだ。

ゲームをクリアしたという達成感は感じられなかった。実は、このゲームはもう8度も初めからやり直している。むしろ残ったのは大量の疲労感だ。良く考えてみると、夕食を食べ終えてから今の今までずっと休み無しでテレビゲームをやっていた気がする。

(……つまらないな)

最近、何をやっても面白く感じない。何をしようとしても、一向にやる気が出ない。

中学に居たときは、勉強がそれほどば抜けている訳でもなく運動神経も平凡だった。だから高校も、レベルが低く落ちる心配が無い所を受験した。そんな時、ふと疑問に思ったのだ。何のためにこんなことをする必要があるのでろう、と。

何のために生きる必要があるのか分からない。そう気づいてしまっ

ただ。

それからは、何もかもが他人事のように思ってしまった、透樹は傍観者のように振舞うようになった。

何かを見ても感情を抱くことが少なくなり、傍からは冷徹な人間として見られていった。

時計はもうすでに1時をまわっている。明日は日曜だから遅く寝ても構わないのだが、透樹起きてても何もすることも無いのでそのまま寝ることにした。

だがその時、突然頭の中で誰かの声が鳴り響いた。

《ソノ前ニナニカ忘レテナイカ?》

「な・・・」

透樹は思わずベットから上半身を起こした。

周りには誰も居ない。聞こえた声は男のもののようにだったが、親父の声とは違っていた。

声の主が誰なのか。考えてもどうせ分からないだろうと思った透樹は、自分が一体何を忘れているのかの方を考えることにした。

学校からの課題は無かったはずだ。あっても多分、透樹はやらないだろうが。

風呂は夕食の前に入ったし、歯磨きは・・・してないけどそれを忘れるのは良くあることなんだが。

「・・・あ」

思い出した。

確かゲームをしている最中に、携帯にメールが来たことを知らせて着信音が鳴っていた。だがその時透樹は、ゲームを中断するのが面倒だったのでメールを確認するのを後回しにしていた。

たかがメール如きにわざわざ声が頭に鳴り響くかどうかは謎だが、メールが来ること自体滅多に無い透樹はすぐさま携帯を持ってくるとメールを確認した。

「愁から・・・か」

牧原愁^{まきはら しゅう}。透樹の数少ない友の一人。いや、今はもう友であるのかは分からない。

なぜならば、彼が3ヶ月ほど前から不登校になって以来、会っても話してもいないからだ。

愁と透樹は、中学が同じだったのでそのことがきっかけで高校から良く話すようになった仲だ。だが愁は、高校に入ってからしばらくして何度もガラの悪そうな先輩に呼び出されるようになった。

一体彼らは、何のために愁を呼び出していたのか。それは、聞かなくても愁の様子を見ただけで大まかな察しはついた。愁は一言で言うなら下級生イジメを受けている。本人は気づいていなかったが、首の後ろに痣が残っていることがたまにあった。

だが、その時の透樹は既に冷徹な人間になりきってしまった後であり、何をしようとも愁の受けている虐めを止める事が出来ないということを知っていたため、透樹は何もしなかった。

それでもただ一つだけ、あいつに「悪いけど、俺はお前を虐めから助けることも庇うことも出来ない」という内容のメールを送った事がある。その時は「大丈夫」という返事が返ってきたが、それから

一週間もしないうちに愁は学校に来なくなった。愁からのメールもそれっきりだった。

そして今日、3ヶ月ぶりに愁から来たメール。そこには、「小遣い叩いて明日、少し遠出したいんだけど、一緒に来てくれないか？」と書かれていた。

「遠出・・・って、ずいぶん突拍子もない内容だな・・・」

透樹の知る限り、愁はそんなことをいきなり言い出すような奴ではない。

だが、彼の心の傷が少しでも癒えるのならば、遠出に行かせてやるのも悪くないのかもしれない。

そう思いながら透樹が返信ボタンを押そうとすると、ついさっき聞こえた声がまた頭の中で鳴り響いた。

《誘イヲ受ケロ》

「あーはいはい」

どうやら、謎の声が言う”忘れていること”とはメールの確認で正解だったらしく、その謎の声は透樹を愁の言う遠出に連れていかせたいらしい。普段は、あまり他人からの指図を受けない透樹だったが、なぜかこの声の命令を聞くことに悪い気はしなかった。

返信するメールの内容に了承の言葉を入れ送信すると、透樹は眠るために目を閉じた。

一、暗黒の声（後書き）

謎の声の主が一体誰なのかは、後々発覚する予定です。

まあ、察しの良い方は既に予想出来るかと思いますが（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340j/>

双月の照らす世界譚～月夕の魔王～

2010年10月9日06時29分発行